

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34523

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H04477

研究課題名（和文）マレー半島における海上華人集落の形成過程と居住文化の変容・継承に関する研究

研究課題名（英文）Research Related to the Formation Process of Ethnic Chinese Settlements on the Sea in the Malay Peninsula and the Transformation and Inheritance of Dwelling Culture

研究代表者

長野 真紀（NAGANO, MAKI）

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授

研究者番号：10549679

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,700,000円

研究成果の概要（和文）：海外渡航が制限されていた期間中に国内の海辺集落（京都府伊根、熊本県崎津）の立地と形態、海と住居の関係性について調査し、生活様式や海との関わり方の変化に対応しながらかたちづくられてきた空間の歴史の変遷が明らかになった。また、海外学術研究会のオンライン参加と文献調査をすすめ、東南アジアの植民地都市と建築、華人の民俗宗教や宗族などの維持・変容について把握した。ペナン島の現地調査では、住居内外および棧橋の詳細実測と生活の記録を中心に行い、住居増殖の過程、住まい方の変容、空間機能について読み解いた。さらに、居住者へのヒアリングを通して相互扶助、伝統行事（拜天公）について詳細を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究対象地はマレーシア・ペナンの世界遺産地区に指定されているが、集落の実態を把握した史料は乏しく、スクワッター集落として住まいの空間構成や生活環境は長い歴史の中で閉ざされてきた。19世紀に多くの船舶が停泊できるよう波止場と公共棧橋が造られ、そこに付随する休憩小屋が建ち並ぶようになったのが集落の原型であるが、本研究を通して住居増殖の過程や水上住まいの特異性などが明らかになった。本研究成果は陸上居民が水上に定住した生活様式変容の一例として、また、厳しい環境を克服した華人の新しい住まい方として重要な意味を持つ。

研究成果の概要（英文）：During the period when overseas travel was restricted, we investigated the location and form of domestic waterside settlements (Ine, Sakitsu) and the relationship between the sea and housing. As a result, the historical evolution of lifestyles and spaces was revealed. Then, we conducted an online participation in overseas academic conferences and a literature review. And we grasped about colonial cities and architecture in southeast Asia and maintenance and transformation of religious clans.

In the field survey on Penang Island, we focused on detailed measurements of the interior and exterior of the houses and the jetty, as well as records of daily life, in order to decipher the process of housing proliferation, changes in housing styles, and spatial functions. In addition, through interviews with residents, we confirmed details about mutual aid and traditional events.

研究分野：住環境計画

キーワード：海上集落 移民 建築様式 暮らし 文化

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となるマレーシア・ペナン島に位置する海上集落は、水上居住の歴史的な流れに逆らうように、中国福建省の沿岸部に居住していた民が島嶼や会場へと住む場所を移した事例である。そこには、「沿岸から島嶼、海へ」という新しい図式が構築されており、従来の技術的な建築の進化にはない、人々の暮らしの発展による居住文化の変容を見ることができる。安全性や快適性を求めた結果ではなく、当地の環境を深く読み取り、住むための空間作法を見出した彼らの集落・住まいの特性からアジア固有の「空間認識と場のつくり方」を学ぶ。

マレー半島の旧イギリス海峡植民地へ19世紀に移住してきた華人移民とその子孫は、初期の移住と定住パターンの典型として、同氏族が結束する傾向にあった。移住当初は、陸地のショップハウス（長屋形式の住宅）に居住していたが、港・棧橋での事業発展とともに現在の居住地である「海上」へと移り住んだ。現在までの約100年の歴史の中で絶えず取り壊しの危機に直面しながら、2008年には世界遺産保存地区に指定された。しかし、集落の実態を把握した史料は乏しく、住まいの空間構成や生活環境は長い歴史の中で閉ざされてきた。

## 2. 研究の目的

中国福建省からマレーシア・ペナン島へ移住してきた華人の海上集落を対象に、住居の集合原理および居住空間が持つデザイン理論を明らかにすることを目的とする。対象地では、1900年代半ばに15集落が確認されているが、フェリーターミナルや都市開発の波にのまれ、1960年代以降は、7集落を残すのみとなった。

多民族国家のマレーシアでは民族ごとに固有の住居・生活様式を持つ。マレー系の住居は高床式で通風・防虫・湿気・洪水への対応に優れ、左右非対称の正方形の平面プランが多い。一方、中華系の住居は、平土間で平面に中心軸を持つ左右対称の矩形プランもしくは、間口が狭く奥行のある中庭付きの長屋プランに居住する。本研究の対象集落は、両者の空間特性を兼ね備えた居住空間を持ち、且つ海上に住まいを形成している。臨地調査を通して、住まいの変遷と両者共通の空間構成を解明し、空間の多様性と持続性について明らかにする。

国境を越えた人の移動が激増する時代となり、多様な分野で移民研究が行われている。本研究では、対象を総合的かつ国際的に捉えるため、複数の専門を持つ海外研究者との共同研究へと発展させ、領域が交差する領域から新たな問題と可能性を見出し、デザイン分野の裾野を広げていくことを学術的な目的とする。

## 3. 研究の方法

これまでの予備調査の成果をもとに、本研究では「居住空間」、「集落空間」、両空間を通してみる「構成とデザイン」を対象に、環境特性、民俗性、時間軸、機能性の面から12個の要素を読み解き、場所への順応方法や民族固有の空間特性を明らかにする。また、1集落（多姓集落）を除き現在まで守り続けられている一族居住の要因と、海上居住権の仕組みを明らかにするため臨地調査（実測・聞き取り）を実施し、国内外の図書館で史料および古地図を収集し、過去から現在までの空間変容の軌跡を追いながら、海上華人の歴史とその生活実態、気候・風土に対応させた住居のかたちについて考察する。

本研究は海外の研究者との連携協力が非常に重要である。これまでの研究を通して連携協力が構築できているシンガポール在住の建築士、マレーシア在住の設計士に協力を求める。調査は、①住生活学、②文化人類学、③建築学、④社会学の4つの関連性から導き出される以下の8領域を核として展開し、住居と集落の持続性、通態性、風土性、地域性について読み解いていく。

- 1) 居住形態を対象に、生活様式の諸相、居住空間の変容と継承についてまとめ、住まいの型を明らかにする。住み方調査を通して、団欒、食事、就寝、接客などの生活行為が住居・集落のどこで行われているか、生活行為と空間の関係性を読み解く。
- 2) 住生活学と文化人類学の分野から、多民族社会を背景に形成されたマレーシア文化の特性と、中国福建省からペナン島へと住む場所を変えながら構築してきた海上集落独自の有形・無形の民族文化について、風土性を読み解きながら明らかにする。
- 3) 儀礼・風俗を対象に、集落の年中行事と民族固有の宗教観について明らかにする。
- 4) 共有空間の利用頻度、空間の使用密度についてまとめ、暮らし、生産、労働、祭祀を通して見る住民相互の交流と、各集落のコミュニティの関係性について明らかにする。
- 5) 人間・歴史を対象に、ペナンの歴史と多民族社会における海上華人の社会的な位置づけを時代区分でまとめる。
- 6) 世界歴史遺産地区に位置する海上集落の問題点を明らかにし、相反する文化財保護と観光が共存できる方法を模索しながら、海上集落の持続的な発展について考察する。
- 7) 地域の生態系に基づく住居システムと建築技術について明らかにするため、住居の平面プラン、室内外の環境、増改築の手法、基礎の構造について悉皆調査を行う。
- 8) 海上集落におけるデザインコードを解明するため、住居の配置、屋根と壁の色合い、集落の区画形成と棧橋の形、建物の素材についてまとめ、集落景観の特性を読み解いていく。

#### 4. 研究成果

1-2年目は、海外渡航制限のため国内2ヶ所の海辺集落の調査を実施した。地形的制限がある両集落の空間構成を見ると、海との関わり方だけでなく、住居間の通路が重要な生活空間として機能していることが共通項として明らかになった。

##### [国内調査①\_伊根]

京都府丹後半島の島北端に位置する伊根町は、伝統的建造物群保存地区に選定され、亀山、耳鼻、立石、大浦、平田、高梨、日出の7集落が現存している。建造物の数は母屋134、舟屋113、土蔵128、その他63、工作物5、環境物件15、合計458件にのぼり、世帯数・人口は減少しているものの329世帯・841人が登録されている（2015年時点）。住民の高齢化率の高さが問題である一方で空き家率は低く、特に保存地区選定後は景観保存の取り組みが進んでいる。

集落形成時は現在の海岸線より約20m高い台地や谷あいの奥に住居があったといわれ、人口の増加に伴い漁業を営むのに便利な海岸近くに住むようになった。舟屋の発生経緯は明らかにされていないが、江戸中期頃から存在していたと伝えられている。伊根湾は満潮・干潮時の差が30～50cmほどしかなく海面変化による影響もほとんどなく、安定した自然条件を整えている。満潮時には舟を直接、舟屋まで引き込むことができ、舟と漁具の格納庫兼出航準備の作業場として使用されてきた。現在、海への開き方はいくつか種類があり、護岸が築かれて完全に閉じてしまったものや、舟を持っていなくても舟を置く機能を残している世帯も一部ある。

かつての舟屋は草葺き平屋で壁がなく、藁や古縄を下げた風通しの良い造りになっていた。梁の上に足場板を並べ漁具置き場にしていたが、現在は木造2階建て瓦葺に変化している。住民へのヒアリングによると、50年程前から家族数の増加に伴い母屋だけでは空間が手狭になり、舟屋の2階部分を居室（離れ）として使用するようになった。主に若年夫婦の居室や老人夫婦の隠居部屋として使われることが多かったというが、近年は家族数の減少により空室となった舟屋を新たに民宿（客室）や飲食店として再利用する事例が増加している。また、漁業とは関係のない倉庫や車庫などの半屋外空間に変化しているところも確認できた。このような場合、海との関係を分断した用途変更により、漁業に関係する仕事場としての機能は失われている。

舟屋の背面・山側には、昭和初期に整備された道路を挟み平入の母屋、蔵が並ぶ。母屋と舟屋の間を貫通する道路の整備が始まったのは昭和6年で、浜側の建物を移動させながら約10年間かけて拡張整備をすすめた。この道路は「ニワ」と呼ばれ、母屋と舟屋をつなぐ庭であり仕事場であった。それまでは集落間の移動に海岸沿いを通ることができない箇所もあったため舟を利用することが多く、住居へのアクセスが海側にあった。

母屋の入口は接客の場、奥側は家事や日常生活の場として使用され、床の間・仏壇・縁側があり、格子や簾を取り除くと道（ニワ）と一体の空間となる。道とのつながりによって集落全体のコミュニケーションの場となり、世帯ごとの空間領域が集落単位へと拡張している。海との関係性以外にも、海から山までの短い軸線上に造られたニワの有り方が特徴的な空間である。

##### [国内調査②\_崎津]

熊本県天草諸島の下島に位置する崎津集落は大小120島ほどの島々で構成されている。下島は高度200～400mの小起伏の山地が多く、北東部には緩傾斜の丘陵・山麓地が広がる。崎津集落が位置する南西部は、羊角湾浦内浦の奥深い入江が広がり、波が穏やかな環境下にある。山と海に接する狭隘な土地に居住域を形成している。2020年の国勢調査によると人口は670人、65歳以上の人口が全体の50.1%（336人）となり、高齢化が進んでいる。

集落は、近世より集落前面の海域を利用すると同時に、狭小な海岸の平坦地やその周囲及び山地の斜面を農地として利用する半農半漁村として展開してきた。崎津地区は漁村特有の密集した集落構造を持ち、今富地区は入り江の最奥に位置した2つの支流が形成するわずかな迫地形上にあり、密度の高い居住環境であった。

1569年にイエズス会宣教師によりキリスト教が伝えられ、布教の拠点となり、禁教期に入っても組織的に信仰が続けられた。山裾には崎津諏訪神社が位置し、集落中心部にはカトリック崎津教会がそびえ、宗教の共存を観ることができる。集落の中には信仰の痕跡や聖地が残り、主要道では諏訪神社の例大祭や教会の行列が行われている。流通・往来の拠点として発展した歴史と、漁業を生業としてきた独特の景観が評価され、2018年に世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産に登録されている。

集落には、カケとトウヤと呼ばれる住居や漁業関連施設によって構成される空間がある。カケは護岸に接している住居から海に張り出して設置されているテラス状の建造物で、漁師の作業場兼船への乗り降りを可能とする棧橋としても機能している。集落は平地面積が少なく住居が密集して建ち並んでいるため、各住居は庭の確保が難しく、魚の天日干し、網の修繕、道具の手入れなど、陸上作業を実施する場所としてカケが設置されてきた。現在は数が減少し老朽化が進んだカケも多いが、かつての海での暮らしを象徴する空間として維持されている。

トウヤは住居間の通路で、幅員が100cm未満の海に向かう小路である。数軒ごとに設けられた小路は住民の交流の場としても機能し、集落の共有空間として位置づけられていた。昭和初期から集落で生活をしている住民へのヒアリングによると、江戸時代の集落人口は2,500人、昭和初期は1,500人が暮らしていた。狭小の土地に多くの居住者が住んでいたため、住居は一戸あたり約3坪（10㎡）程度の広さしかなく、非常に密集した居住域であった。現在は平均して約10坪の

敷地面積があり、主要道路に向かって（海を背にして）配置されているが、当時は海に向かう通路\_トウヤに面して住居入口があった。解放された玄関や窓から互いに声をかけながら、共有空間（通路・庭・広場）の機能をもつトウヤを通る。生活用道路としての機能だけでなく、住居と海をつなぎながら住民同士の交流も育む重要な空間であった。古い写真を見ると、カケは護岸に隙間なく建ち並び、現在のものより海に長く張り出した栈橋のような空間であった。漁師の減少により職住一体となった空間の関係性が薄れてきている。



伊根集落 (2021. 12. 14)



崎津集落 (2022. 3. 24)



カケ (2022. 3. 24)

マレーシア・ペナンの海上集落は、栈橋 → 休憩小屋 → 住居へと発展し、伊根では、船置場 → 船置場+上階に住居 → 住居・店舗・倉庫へと変化し、崎津では住居 → 住居+カケへと海に延伸してきた。平地面積が少なく狭隘な地形に集落を形成した伊根・崎津と、海上に構造物を建てて集落を形成したペナンを比較し、場所の選び方や海との関わり方の空間変遷を見ることができた。

## [海外調査\_マレーシア・ペナン島]

### ・集落の歴史的経緯

海外渡航解禁後、本研究対象地のペナン島にて計7回の現地調査を実施した。はじめにドローンによる空撮を実施し、全7集落の空間配置図の作成を進めた。現状の配置図との差異を確認し、各集落の規模や周辺環境との関係性を読んだ。その結果、約130年の歴史の中で自然発生的に増築を繰り返し、現在まで集落の原型を維持している周集落を主要対象地に選定し悉皆調査を実施した。また、University Sains Malaysia大学図書館での資料収集、消滅した集落の写真展観覧、Penag Hillから世界文化遺産認定区域の眺望と地勢を確認した。そして、世界遺産機構の責任者と面会し、世界遺産認定の経緯、建物の管理方法、建物のデザインコード、土地使用許可等について説明を受けた。

集落居住歴50年の住民へのヒアリングによると、1950年～70年代にかけて集落は非常に貧しく危険な地域とみなされており、大きな社会問題も抱えていた。もともと公有水面の不法占拠であったが、1969年に暫定的な占有許可があり居住が認められるようになった。しかし、それ以降も絶えず取り壊しの危機に直面してきた。

世界遺産の審査にあたり、イコモスの評価は、①5世紀以上にわたって東西交易の拠点であり、時代の特色をよく示していること、②アジアのみならず西欧も含めて様々な面で文化の多様性を体現していること、③ショップハウスやタウンハウスの類型が非常に豊富であることの3点にあった。貿易で栄えたジョージタウンの歴史を振り返ると、この栈橋なくして現在のペナンは成立していなかったことが評価された。

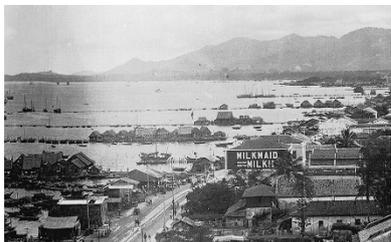
集落の成立は19世紀に多くの船舶が停泊できるよう波止場と公共栈橋が造られ、そこに付随する休憩小屋が建ち並ぶようになったのが始まりである。栈橋での仕事が始まった当初は住む場所がなかったため、陸地側の宿泊所で起居していた。その後、貿易・労働で稼いだ資金で少しずつ休憩小屋を改修し、定住するための住まいを造り上げていった。当初は間仕切りのないワンルームであったが、家族数の増加とともに個室を設けるようになった。

### ・現在の住まいの構成

現在、周集落には75戸の住まいがあり、居住者数は200～300人で推移している。完全に空き家になった住居、賃貸に出している住居、週末居住用住居、日中用住居（夜は集落外の住まいに帰宅）など、住まい方にも複数種類ある。ヒアリングによると、昔の家族構成は両親・子（5～6人）・孫が一般的で、3世代と一緒に生活を営んでいた。現在は働き盛りの40～50代が少なく、集落外に住まいの拠点を持っている場合が多い。集落は居住区と商業区に分かれており、昔ながらの生活環境が維持される一方で、2008年の世界遺産認定後は観光客が増加し、日常生活にも大きな変化があった。

75戸は増改築を繰り返しながら現在に至るため、かたちや規模に個性があり1つとして同じ間取りはない。調査期間中に栈橋の実測および集落内の35戸の住居の詳細実測を実施した。部屋の大きさ、機能、開口部の位置、家財道具の種類、家族構成について記録し、平面図を作成した。住居入口に面する空間は応接間の機能を持ち、神や先祖が祀られる。一番奥に台所や水回りが配置される例が多く、住居の増改築とともに水回りを更新してきた。住居は表と裏の2カ所に入口を持ち、海に面した住まいは必ずデッキが設置される。住居前のデッキは五脚基と呼ばれる空間で、陸上のshophouseと同じ機能を持つ。内部の床は木床、木床+CF、三和土などいくつかの種類があるが、靴を脱いで過ごす。

建物間口、ファサード意匠、隣棟間隔、棧橋との関係性を明らかにするために、居住区に位置する家屋番号73～76Jまでの全15棟の連続立面を実測し、干潮時には棧橋の高さの計測を進めた。調査対象は大きく2つあり、①屋根のかたちと素材：妻入り・平入りの分類、屋根勾配・軒高・各家屋の最高高さ、屋根葺材、②住居の素材と色彩：間口・軒出・隣棟間隔、入口の位置・寸法、神位牌の位置、外壁仕上げ材・塗装色、装飾物について調査した。棧橋の床面から海底までの深さの計測では、集落全体で捉えた場合、最も浅い箇所は陸地で0m、最も深い箇所は東端の3.03m、干潮時に人力で修繕等の手入れが可能で高さであり且つ満潮時に建物に海水が浸水しない仕組みであることが明らかになった。



1910年集落全景 (PENANG THEN & NOW)



周集落全景 (2024. 3. 16)



住居と棧橋 (2022. 11. 29)

### ・伝統行事(祭事)と公司

旧暦1月9日の玉皇大帝生誕日に行われる集落最大の祭り「拝天公」の参与観察を通して、行事の概要と実施主体の公司(集落コミュニティ)について把握した。拝天公は福建由来の伝統的な春節行事で、2023年は1月29日(旧暦1月8日)に執り行われた。

集落の公司が主催し、1月28日午後6時過ぎから理事会メンバーによる供物棚の設営が始まった。供物棚の全体は幅が約2m、奥行きが約15mで、さまざまな神名と神像が描かれた15m程の灯籠が中央に置かれ、その両側に供物を載せるようになっている。1月29日午後5時過ぎに供物棚の端に紙製の天公座が据え置かれ、その両端にサトウキビが結びつけられた。そして、奉納された鮮花(献花)88個も並べられ、午後6時過ぎからは住民らが供物を次々と持ち寄り、瞬間に供物棚が埋めつくされていく。これらの準備と並行して朝元宮では奉祀されている玉皇大帝を遷座する儀式が仏僧とその信者らにより執り行われた。集落入口外側の清岩宮、集落最奥の海側先端にある感天宮でも天公炉にサトウキビが結びつけられる。午後11時に花火が打ちあげられると爆竹が立て続きに鳴り、集落一帯は喧噪に包まれる。その一方で集落内の住居では応接間にある祭壇や位牌、住居入口にある天官の祭壇にロウソクを灯して静かに祈る姿が見られた。

拝天公は、集落にとって重要な行事であり続けてきた。故郷に由来する行事であり、福建人であることを再確認する大切な機会である一方で、行政により大規模なイベントとなり、多くの市民がこの場所に親しみを感じ、集落に対するネガティブな感情から変化し、肯定的に受け入れる機会を提供している。しかし拝天公という福建人にとって固有の伝統的行事に行政が介入することにより、その役割や意味づけが大きく変わってきているような印象を受けた。

住民へのヒアリングおよび既往研究(The Jetty Dwellers of Penang, Lean Heng Chan, 1980)によると、公司の草創期は中国の故郷の習慣を引き継いだ父方居住の父系親族集団であり、単姓コミュニティであった。公司は親族組織であるだけでなく、苦力やサンパン漕ぎの労働配分をおこなうためにkoolie keng(苦力間)を組織した。この組織の差配により世帯の経済的格差もほとんどなかったが、1960年代に中継貿易が廃止されて集落の中心的な仕事なくなるとkoolie kengは解散した。この頃から外部に職を求めざるをえなくなり、多様な価値観や社会関係に接触することで住民の意識も変わり、家族や公司も変わり始めた。外部資本が流入するとともに親族以外の居住が許可され、結婚して他出するはずの娘夫婦が、そのまま同居するようにもなった。

最後に、これまで対象集落の史料は乏しく歴史的経緯を知ることが難しかったが、現地資料や既往研究、住民へのヒアリング、朝元宮の掲示板資料を参考に1700年代から現在までの流れを年表にまとめた。



拝天公準備\_供物台 (2023. 1. 29)



集落入口の祭壇 (2023. 1. 29)



集落内の祈り (2023. 1. 29)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	今村 文彦  (Imamura Fumihiko)  (50213244)	神戸芸術工科大学・芸術工学部・名誉教授   (34523)	
研究分担者	宮代 隆司  (Miyashiro Takashi)  (80512540)	神戸芸術工科大学・附置研究所・研究員   (34523)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	張 シューイン  (Teo Siew Ying)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関